

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・中島慶二

小梨平のクマ襲撃事件

二〇二〇年は各地でクマ（ツキノワグマ。以下この稿において同じ）の話題が多かったが、人身被害が生じて大きなニュースになったものに上高地での八月八日の事件がある。新聞各紙が報じた事件の内容を簡単にまとめると、概略以下のようなことである。

河童橋のたもとからほど近い小梨平の野営場（野営場エリアは、河童橋から見て手前側にフリーテントサイト、奥側にコテージなどが整備されている）のフリーテントサイトの一角でソロキャンプをしていた女性が、テントの外から突然クマに襲われ、テントごと引きずられ、足をひっつかかれて一〇針を縫うけがをした。女性はすきを見て逃げ出し、すぐ近くのトイレに立てこもって助けを呼びそれ

以上の被害にはあわずに済んだ。女性のもっていた食料が食べられた様子などの状況から、人間の食物を狙って襲ったのは間違いない。

上高地の被害防止対策

小梨平では、クマが出没するのは当然である。周囲は原始性の高い森林であり、上高地地区のエリアのみ鳥状に開発されているが、国立公園であるため開発は自然景観と調和するように行われている。集団施設地区の中も樹木や植生がふんだんに残されており、上高地のエリアの中であっても、人工的な施設や人の存在を除けば、クマの生息環境として良好な状態を維持しているからである。

クマが出没するという表現はそもそも上高地ではおかしいのであって、クマが生息する地域で、人とクマが遭遇するということなのだ。

ここで、クマと遭遇する者と自体は市街地に比べ日常的であり、緊急事態が発生したというような特別の問題とはみなされていない。時々、人の食物に餌付くクマが発生するが、その時は捕獲して奥山へ運び、放獣を行うという対応をとっている。

クマの生息域の前線を上高地から遠ざけるという対応ではなく、クマが生息していることを前提として、餌資源の管理によって危険なクマを作り出さないようにするということが上高地のクマ対策の基本だからだ。

小梨平野営場フリーテントサイトは、環境省所管の国有地を集団施設地区の一部として整備した施



上高地の裏山はクマのすみか

設であり、運営主体は環境省である。環境省は今回の事件を受けて野営場を一時閉鎖し、野営場の利用者の事前予約導入によるコントロール、クマが隠れられるテントサイト周囲の背の高い笹藪の刈払い、食料のテント内管理の禁止など、いくつかの新たな対策を講じて野営場を再開し、その後問題は生じていない。

この方法でクマとのあつれきを生じさせないためには、上高地で活動する観光客や観光事業者、工事関係者などすべての人間が、餌資源を確実に管理することができるとどこにかかっている。

上高地ではサルの餌付きの問題もある。今回の事件を機に、これらの動物による人身被害を防止するため、人由来の餌資源の完全なコントロールに向けた対策を強化しなければならないだろう。

クマ出没の全国的動向

環境省がまとめた「クマ類出没対応マニュアル」で指摘されている、人の生活圏への大量出没の原因は、簡単にまとめると、①クマの生息環境である広葉樹林の森林

蓄積が増加しつづけている②クマの分布域が中山間地域を中心に拡大傾向にある③クマの主要な餌資源であるブナ科樹木の果実の成りの年変動が大きく、成りの悪さが引き金となって行動圏拡大を起す、の三つである。

このことは、単純に考えれば日本のクマの生息数が既に日本の森林が有するクマの可能生息数の上限まで、要は飽和状態に達していることを意味している。あとは樹木の果実の凶作や災害などが発生するたびに行動圏の拡大を起すということなのだ。クマにはもともと天敵はおらず、自然増加率も、兵庫県の研究例などでは一・六%という推定値があるなど、それほど小さいとは言えない。これらの状況から見ると、今後、全国的にクマの出没事例はさらに増加していくのではないかと予想される。

山岳国立公園のリスク

では、クマの通常の生息域である山岳の国立公園のような地域で、実の成りの悪い年、クマにどのような行動変化があるのだろうか。

類推であるが、餌資源が少なければ、クマの行動は通常年に比べて活発になると考えるのが妥当だろう。また、普段は人との遭遇を避けるなど慎重な行動をとるクマでも、空腹時には大胆に人前に姿を現す可能性もある。

本来の生息地である山岳地域でも、実の成りの悪い年には人とクマの遭遇のリスクは高まると考えたほうがよさそうだ。

街なかであつても山岳観光地であつても、クマとの遭遇リスクを減らすのは、結局のところ、人為的な餌資源にクマが餌付かないように徹底的に管理することである。クマは学習能力が高い。クマが人



野営場閉鎖看板

と餌を結び付けてしまわないよう、野生動物にとって栄養価の高い、生ごみや農作物を入手可能な状態で放置することや、果樹を植えることなどを適切に管理しなければならぬ。

キャンプ場でのゴミ処理の徹底、観光客や登山者などによるゴミのポイ捨てなどにも、これまで以上に神経をとがらせる必要があるかもしれない。クマが生息している国立公園でクマとの適切な距離を保つためには、人の行為を徹底してコントロールしていく以外はない。クマの生息密度が明確にモニタリングできていない以上、気付かないうちにリスクも高くなっていくからだ。

求められる早めの対策

日光湯元ビジターセンターでは、自然公園財団が中心となり、クマの目撃情報を収集し、ホームページで公開している。これを見ると、目撃情報はかなり多いが、今のところ人身事故につながる状況には至っていないようである。こうした生息情報の収集・共有は国立公園としては先進的で評価される

べきであろう。

クマが生息する山岳国立公園では、地域の行政機関や民間事業者、さらには公園利用者も含めた関係者の連携によって、生息動向のモニタリングと、徹底した餌資源管理対策、情報の適切な提供、遭遇事故発生時の体制づくりなどが求められている。

奥日光に限らず、現時点ではまだクマとの遭遇を意識する観光客は少ないだろう。クマの存在を積極的に情報提供しつづけない観光関係者もいるかもしれない。だが既に、飽和状態と考えられるクマとの遭遇リスクはかなり高まっていると認識し、早めに行動するほうが危機管理上は上策である。

参考文献

- 1 環境省信越自然環境事務所報道発表資料
- 2 坂田宏志、岸本康賢、関香葉子、ツッキー、ワグマの個体群動態の推定(兵庫県二〇一一年)兵庫ワイルドライフレポート(10111)

中島 慶二 ● なかじま けいじ

一九八四年環境庁入庁。日光、尾瀬、阿蘇、大雪山などの現地管理業務、長崎県庁、那覇事務所長、復興庁、野生生物課長などを歴任。退官後二〇一七年より江戸川大学国立公園研究所長。